

**平成 30 年度 達成状況 及び
平成 31 年度 教育(年度)目標**

東筑紫短期大学

目 次

建学の精神と教育理念		1 頁
美容ファッションビジネス学科	達成状況	2
	教育目標	7
保 育 学 科	達成状況	10
	教育目標	12
食 物 栄 養 学 科	達成状況	14
	教育目標	17
専 攻 科	達成状況	21
	教育目標	24
学 生 部	達成状況	26
	年度目標	30
教 務 部	達成状況	33
	年度目標	35
事 務 部	達成状況	36
	年度目標	37

建学の精神と教育理念

昭和11年筑紫洋裁女学院が設立され、その後、幼稚園、中学校、高等学校、東筑紫短期大学、九州栄養福祉大学そして同大学院、九州リハビリテーション大学校と本学園は総合学園化してきて今日に至っている。この70数年間の道のりのなかで一貫してそれぞれの学校教育の精神的基盤になってきたのが「筑紫魂」という建学の精神である。現在は以下に記す「筑紫の心」となって簡略化されているが本学の教育理念の基盤として根底に流れているのである。創設者・宇城信五郎の起草したものである。

「教育とは心の畑を耕すことであります。ともすれば草を生い茂らせ狭隘にして痩せ細りがちな心の畑の草をむしり肥料をつちかい新生する芽を伸ばしていくところに教育の使命があります。

東筑紫学園の建学の精神は教職員学生生徒が心をひとつにして勇気、親和、愛、知性の四つの芽を心の畑に種蒔き育てていくことにあります。

筑紫の心は国を愛し労働をいとわず親や祖先をあがめ己れをむなしくして社会に奉仕する人間像を理想にしています。」

そもそも建学の精神とは、主に私立大学（学校）などが創設されるときに、その大学の創設者がかけがえのない独自の性をもった理想的な教育思想・理念のことで建学の思想ともよばれる。主として、その大学の設置理念、教育内容の特徴、養成する人材の必要性、重要性及びその大学の社会に対する貢献内容などが表現されている。

本短期大学は被服科の短大から始まった。社会に役立つ実学としての和裁・洋裁とそれを根っこで支えるこの「筑紫の心」が不可分一体を目指して本学の教育がなされてきたのである。本学の生活実学教育課程はそういう意味で二つの構造的性質を持っている。つまり衣、食、住、子育て、介護という各学科の専門の知識、技術を修得探求させるということと、筑紫の心にある四つの徳目を育てながらやがてそれらを調和させ己をむなしくして社会に奉仕できる人間に成長させるという二つの教育的要請である。ここに本学の「生活者実学」の特徴がある。換言するなら現実社会で役に立つ専門的力とどんな困難な状況にぶつかっても生き抜いてゆく「^{まっ}全き生命力」を養成するということである。

特にその生命力の養成における基本は、勇気・親和・愛・知性を力強く成長させ一つの人格の中で調和統一し真澄（ますみ）の天空のような心を創りあげることである。そのなにもものにも汚されない泰然自若の真澄の心が実存する時はじめて筑紫魂が発動するのである。この場合の筑紫魂とは言うまでもなく筑紫という地名から発する宇宙魂を指しているのである。我々は己を空しくしてこの我々を創造して下された宇宙創造の根源的力に触れ合うことによつてのみ社会に奉仕できる最高レベルの生命力を発現できるのである。

このように生活実学教育理念を支えるものの根本として本学の建学の精神が存在している。

平成30年度 教育目標の達成状況

— 美容ファッションビジネス学科 —

(1) 学生支援

知識・技術の習得に加えて、思考力・判断力・表現力等の能力や、主体的に学習に取り組む態度の育成を目標とした「学習支援」を、卒業後必要とされる、社会生活する上での多岐にわたる「人間力」を培うことを主軸とし、今年度も様々なアプローチを実施した

① 基礎学力向上のための学習支援体制

学生の教科内容に対する学習意欲の向上以前に、学生の大半が（常識的な）学力が身につけていないと感じ、従って、まず基礎学力を身に付けさせることが必至であると考え、今年度も授業改善に向けた組織的取り組みとして、学生の「基礎学力の向上」に主眼を置いた学習支援体制を整えた。

初年次学生（1年生）のオリエンテーション期間中に、「基礎学力」を計るためのテストを実施し、その結果を受け、初回のテストで100点中49点以下の学生に対し、「RT リメディアルタイム」を開講した。「国語」は合格点だったため、「英語」「算数」について実施した。

講義時間については、出席率や学習の意欲において前年度効果的であり、自主的・継続的に学生が参加しやすかった方法として、時間割の中に組み込み60分間とした。前年度効果的だった実施内容に倣い今年度も、算数においては「小数のかけ算」「分数の割り算」等の、小学校で習得すべき内容を、英語は文章通りに単語を並べ替える中学1年あたりの内容から着手した。

その結果、「英語」では残念ながら一部の学生しか点数の伸びは示されなかったが、「算数」では、初回テストでは5~45点だったのに対し、最終確認（卒業）テストでは67~100点となり、著しい成果が上がった。前年度も同様であるが、今回も学生への問いかけでわかったこととして、「問題の解き方（方法や手順のようなもの）がわからない」「学習の方法（どこから着手すればよいのか?）」とか「今さら聞けない」「今まで特別不便を感じなかった」ことなどが、基礎学力（算数において）低下のその大きな理由であったように感じる。

教科教育を充実するためにも、基礎学力の底上げは大きな課題であり、引き続き根気強い指導が不可欠である。

② 社会人になるための能力の養成

本学の特色ある実務教育の過程で身につく、挨拶・礼儀・言葉遣い・身だしなみなどのマナー教育を始めとし、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力、日々の生活と合わせ、生活者として必要な一般常識の体得等、社会人として必要なスキルやキャリアアップを目標に、特に人格教育、付加価値の高い人材育成という観点において、これまで同様に習得のための支援を主に「キャリアアップ演習」の時間を活用し実施した。

社会人として必要な基礎的知識や、生活人として不可欠な要素を身に付けさせることを目的とし、今年度も専門分野のスペシャリストを特別講義の形式で招聘した。

卒業後直ちに必要な社会人としての知識や人格教育の時間を設けることにより、学生生活においても特色ある教科教育・実務教育の内容充実につながった。

③ 行事教育

建学の精神「筑紫の心」に基づき、これまで通り「行事教育」にも重点を置き、豊かな感性と教養を培い、教科教育においては専門知識や技術を養い、「美容・ファッション・ビジネス」の専門分野で活躍できる人材の育成に努めた。

行事教育としては事前講義を必ず実施した。このことにより、本学科学生の各行事への出席率は高く、その意義や意味性も深く理解しているものと思われる。

(2) 就職活動支援教育の充実

① 就職支援のための講座

今年度も、就職支援に関しては、担任やコースの専門教科担当者と就職指導課とが密に連携を取りながら、学科教員で学生個々へ向け、昨年度より更に深い指導を実施した。

特にこれまでも就職支援として、多岐に渡るラインナップを組んできたが、平成30年度後期より1年生を対象に、より具体的な就職対策として、就職指導課と連携し、外部講師（㈱リクルートキャリア等）による3回の就職ガイダンスを、キャリアアップ演習内で計画・実施しており好評である。

② インターンシップの導入

インターンシップ制は、参加する学生にとって「働くとは何かを実感する、実際の職種・仕事内容を知る、仕事に対する適正を知る」ことができる、大変有意義なプログラムであると考えます。

今年度は残念ながら、正式に書類を交わすインターンシップは実施することができなかった。

ただし、(社会人として勤務し、会社内である程度のポジションにいる)卒業生のネットワークにより、専門分野へのアルバイトという形で、学生にとって真の意味での実践的に貴重な経験や体験を積むことができた。

(3) 地域社会への貢献活動

今年度も地域貢献活動を実施したことにより、学生にとって教科教育だけでなく人格教育においても大きく前進することができたように感じる。

① 社会及び地域貢献活動

今年度も、地域社会や団体の要請をいただき、学生の負荷がかからない部分で、地域活性化等の目的に向け、積極的に地域貢献活動に取り組んだ。その内容は以下の通りである。

【平成30年度 美容ファッションビジネス学科 活動報告】

◆北九州ゆめみらいワーク 2018

日程：平成30年8月24日（金）～25日（土）西日本総合展示場

主催：北九州市

地元企業と市の魅力を伝え、学生の職業感の醸成と地元就職につなげることを目的とする

◆反射材エキシビジョン 2018 特別出品 (展示)

日程：平成 30 年 9 月 7 日 (金) 東京芸術センター21F 天空劇場

主催：一般社団法人 日本反射材普及協会 (後援：内閣府 警察庁)

反射材を使用した衣服の特別展示で 6 回目の参加 本学は協会特別会員 産官学連携事業

◆TGC 東京ガールズコレクション北九州 (フィッティング ボランティア)

日程：平成 30 年 10 月 6 日 (土) 西日本総合展示場 新館

主催：北九州市

地域社会に貢献のため、市からの推薦 (要請) により参加 産官学連携事業

◆こくらハロウィン 市長表敬訪問

日程：平成 30 年 10 月 4 日 (木) 北九州市役所

実行委員会 (本学も参画) の各大学、学生プロジェクトメンバーで市長への表敬訪問

◆こくらハロウィン Fashion & Hair make Show

日程：平成 30 年 10 月 21 日 (日) JR 小倉駅 J AM 広場 (改札前ステージ)

主催：こくらハロウィン実行委員会 (事務局：小倉北区役所)

地域活性化を目標に、市制 50 周年を記念して開催

本学は実行委員会メンバーとして続けて 6 回目の参加 産官学連携事業

◆反射材フェア 2018

日程：平成 30 年 10 月 27 日 (土) ~28 日 (日) 東京 池袋サンシャインシティ アルパ

主催：一般財団法人 全日本交通安全協会 反射材活用推進委員会 (後援：警察庁)

反射材の効果や交通安全の知識を、すべての年代が楽しみながら身に付けることを目的とするイベント内、本学作品のみで構成された反射材ファッションショーを開催 産官学連携事業

◆ギラヴァンツ フェアプレーフラッグセレモニー&ハロウィン Fashion Show

日程：平成 30 年 10 月 28 日 (日) ミクニワールドスタジアム (JR 小倉駅北口側)

主催：株式会社 ギラヴァンツ北九州

地域活性化を目標に、地元プロサッカーチームからの要請により参加

◆シニアカレッジ Fashion & Hair make Show

日程：平成 30 年 10 月 31 日 (水) 東筑紫短期大学 学生ホール

主催：北九州市立年長者大学校 周望学舎 他

元気にシニアライフを愉しむための提案として、本学共催で講演を開催 官学連携事業

◆産学連携事業 反射材を使用した T シャツの商品開発 東筑紫短期大学×(株)丸仁

日程：クラウドファンディングによる出資募集 平成 31 年 2 月 8 日 (金) ~3 月 12 日 (火)

: WEB ストア (ライトフォースストア 楽天) 販売 4 月末~ (予定)

② チャリティ募金

昨年実施した美容師コース学生による学内サロン「salon de CHIKUSHI」を、今年度も美容専門教科の特別実習としての位置づけで、学内の教職員の皆様にモデルとしてご協力いただき実施した。

今年度前期は、後援会総会で案内チラシを配布させていただいた結果、5名の後援会の方（内3名は他学科の方）に参加いただいた。

また、後期は、学科学生の保護者にお声掛けしたところ、12名の保護者にご協力（遠方から新幹線を使いそのためだけに両親で来学など）喜んでいただくことができ、学生の授業内容や成果を発表できる貴重な機会となった。

前期：26名・7,800円、後期：20名・6,000円…合計13,800円（138回の施術）

しかるべき団体にチャリティとして募金、再度皆様に必ず報告させていただく。

③ 学生ボランティア

本学科の特色を活かし、地域活性化に主眼を置いた貢献活動として、ボランティアで今年度もいくつか活動させていただいた。その中で特筆すべきものを2つ挙げる。

北九州市から要請いただき、「TGC北九州 東京ガールズコレクション」へ学生ボランティア（フィッティング スタッフ）として参加した。

また、地元サッカーチーム・ギラヴァンツ北九州からも要請があり、「ハロウィンファッションショー」とピッチ内で選手を誘導する「フェアプレーフラッグ」に参加した。

学生においては、その後の学習意欲や学生生活における意識の高さなど、非常に貴重な経験だったようである。

(4) 入学志願者の増加

前年度の反省を主軸とし、今年度も入学志願者の増加へ向け、様々なアプローチを試みた。その結果、前年度より5名の入学者増となった。今年度実施した内容は以下の通りである。

① オープンキャンパス内容の充実

【東筑紫学園高校×美容師コース 平成30年6月2日（土） 10:30～ 13:30～】

前年度に引き続き、東筑紫学園高校の協力体制も仰ぎ、学園高校だけへ特化した「美容師コース単独のオープンキャンパス」を実施した。

掲げた新たな展開として、学園高校の先生からアドバイスいただいた、「保護者」同伴のオープンキャンパスは残念ながら実施できなかった。

② 学科紹介（学生主体）の活動 アクティブラーニング ワークショップ

【東筑紫学園高校×FBコース（ファッションフィールド）平成30年6月30日（土）

10:30～ 13:30～】

以前からテーブルには上がっていたが中々実施には至らなかった、「学生主体の作品制作のワークショップ」を、東筑紫学園高校の協力体制も仰ぎ、学園高校（服飾類型）の生徒へ向け、今年度開催することができた。時期的なものや作品内容など、詳細について学園高校の先生（服飾類型）と計画・検討し、アクティブラーニング型式で、ワークショップを開催し好評であった。

③ KITAKYUSYU ゆめみらいワーク 2018 への参加

昨年 8 月末、西日本総合展示場で開催された「事業を通して地元企業と市の魅力を伝えることで、学生の職業観の醸成と将来の地元就職につなげる目的」の「KITAKYUSYU ゆめみらいワーク 2018」へ前年に続き参加した。

本学科からは、ルームフレグランス、ヘアメイク実演・コスチューム含めトータルスタイリングによるプレゼンテーション、反射材ドレスの展示を実施した。

来場する多くの（大型バスでやってくる）高校生や一般の来場者へ対応し、大好評であった。

対応した学生は、選抜メンバーであるという意識の高さと責任感の向上が感じられ、この機会を与えられたことにより大きく成長できたようである。

④ 学科紹介リーフレット「GUIDE OF BFB 2018」の作成

前年に引き続き、学科紹介リーフレット「GUIDE OF BFB 2018」を制作した。オープンキャンパスはもとより、学生募集の高校訪問や、進学ガイダンス・出前講義等の際、このリーフレット活用により「美容ファッションビジネス学科の内容紹介」がこれまでより充実且つスムーズに展開できるようになったと考える。特に昨年 8 月に開催された「KITAKYUSYU ゆめみらいワーク 2018」においては高い効果があったように感じる。VP（ヴィジュアルプレゼンテーション）重視で作成したいと考え、前年同様、データ写真撮影・レイアウト・プリント・製本まですべてを、昨年同様、学科内の教員で手掛けた。

⑤ 学生募集のための学科による高校訪問

今年度、北九州市内を中心に筑豊、京築地区などへ、学科独自の、学生募集のための高校訪問を実施した。在学生や卒業生の様子を報告したり、志願者状況やそのほか有意義な情報交換の場が設定できたと考える。

⑥ 出身高校別学生紹介ポスターの作成

在学生のスナップ写真を撮影、デザイン・レイアウト、コメントを入れた PR ポスターを作成した。出身高校へ持参もしくは送付することができ好評だった。在学生にとっても嬉しい体験だったようである。

(5) アセスメントポリシーの展開

平成 30 年度より施行の、美容師国家試験に係わるカリキュラムの改定後、本学科美容師コースにおいて、平成 30 年度入学生より新カリキュラムによる授業展開となった。

昨年度より継続審議だった、3 ポリシー「カリキュラムポリシー、アドミッションポリシー、ディプロマポリシー」の内容を踏まえた「アセスメントポリシー」の策定を今年度実施した。

平成 31 年度 教育目標

－ 美容ファッションビジネス学科 －

(1) 学生支援

知識・技術の習得に加えて、思考力・判断力・表現力等の能力や、主体的に学習に取り組む態度の育成を目標としアクティブラーニングも取り入れ「学習支援」を、卒業後、社会生活する上での多岐にわたる「人間力」を培うことを主軸とし、今年度も様々なアプローチを実施したい。

① 基礎学力向上のための学習支援体制 「初年次教育 キャリアアップ演習Ⅰ」

学生の教科内容に対する学習意欲の向上以前に、学生の大半が（常識的な）学力が身につけていないと感じ、従って、まず基礎学力を身に付けさせることが必至であると考えます。

今年度も授業改善に向けた組織的取り組みとして、学生の「基礎学力の向上」に主眼を置いた学習支援体制をあげたい。

入学生に対しオリエンテーション期間中に、「基礎学力」を計るためのテストを実施し、その結果を受け、今年度は、特に「初年次教育 キャリアアップ演習Ⅰ」の時間を活用し取り組みたい。

内容は、これまでに実施したものに倣い、算数においては「小数のかけ算」「分数の割り算」等の小学校で習得すべき内容を、英語は文章通りに単語を並べ替える中学1年あたりの内容から着手し根気強く指導したい。

② 教育内容の充実

- ・社会の状況を幅広く取り入れ、学科・学生の到達目標を掲げる。
- ・自らの人生を切り拓いていくために求められる資質・能力を培う。
- ・教育を学内に閉じず、学外・地域等と連携する。

「主体的・対話的で深い学び」の実現（アクティブラーニングの視点）

本学科の教科教育の特性として、実習や演習が大きな要素をしめており、アクティブラーニングの導入という点では、かなり以前から教員も学生も「意識せず」実施できていたように思う。

今年度は、アクティブラーニング形式の本質を再考し、講義科目も含め、一方的に受講するのではなく、学生が主体的に取り組める教科内容の展開に努めたい。

「カリキュラムマネジメント」の再考

- ・教科横断的な視点で教科内容を考える。
- ・学生の資質や背景、現状をもとにPDCAサイクルを回す。
- ・地域社会含め、外部の人的・物的資源を活用する。

③ 社会人になるための能力の養成

本学の特色ある実務教育の過程で身につく、挨拶・礼儀・言葉遣い・身だしなみなどのマナー教育を始めとし、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力、日々の生活と合わせ、生

活者として必要な一般常識の体得、また社会人としての視点から必要なスキルやキャリアアップを目標に、特に人格教育、付加価値の高い人材育成という観点において、これまで同様に習得のための支援を主に「キャリアアップ演習」の時間を活用し実施したい。

方法の一つとして、社会人として必要な基礎的知識や、生活人として不可欠な要素を身に付けさせることを目的とし、今年度も専門分野のスペシャリストを特別講義の形式で招聘したい。

④ 行事教育

建学の精神「筑紫の心」に基づき、これまで通り「行事教育」にも重点を置き、人として生きていく力や、豊かな感性と教養を培い、卒業後は社会人として、美容・ファッション・ビジネスの専門分野で活躍できる人材の育成に努めたい。

事前講義を必ず実施し、その意義や意味性も深く理解するよう指導していきたい。

(2) 就職活動支援教育の充実

① 就職支援のための講座

今年度も、就職支援において、担任やコースの専門教科担当者と就職指導課とが密に連携を取りながら、学科教員で学生個々へ向け、昨年度より更に深い指導（相談対応を中心に）を実施したい。

前年度、他学科に先駆け導入した、1年生対象の外部講師による特別就職ガイダンスを、より具体的な就職対策として、就職指導課と連携し、積極的に計画・実施していきたい。

就職に関する情報の多様化や専門化に対応できる能力育成の為、例年のように外部講師による特別講義や、社会人として現場で活躍している卒業生を身近な講師として招聘したい。

卒業後の就職における方向性の指針や確認、社会人としての知識や人格教育の時間を設けることにより、特色ある教科教育・実務教育の内容充実にも繋がると考える。

② インターンシップの導入

インターンシップ制は、参加する学生にとって「働くとは何かを実感する、実際の職種・仕事内容を知る、仕事に対する適正を知る」ことができる、大変有意義なプログラムであると考えます。

これまで参加のすべての学生レポート（報告書）には、「将来の目標や課題を明確にすることができ、今後の学生生活にも活かすように努力する」旨書かれていた。

学生にとって、実際の職場で体験・経験する機会を与えられたことにより、知識や技術だけでなく人格形成の意味からも大きく成長できるのではないかと感じる。

一方で、社会人として、また職場内である程度のキャリアを積んだ（ポス特的に安定している）卒業生のネットワークを活用し、実学という（責任もって仕事に当たる）点からかなりの効果を示す具体的な方法として、専門分野に沿ったアルバイトも経験させていきたいと考える。

(3) 地域社会への貢献活動

昨年実施した地域貢献活動において、参加した学生は、教科教育だけでなく人格教育においても大きく前進することができたように感じる。

本学科の特色ある教育内容を活用し、今年度も学内・学外多方面からのご指導・ご支援・ご協力を仰ぎながら、本学科だからこそ可能な貢献活動を積極的に展開したいと考える。

① ショーを中心とした地域貢献活動

今年度も、地域社会や団体の要請を受け、学生の負荷がかからない部分で、地域活性化等の目的に向け、積極的に地域貢献活動に取り組みたい。

② チャリティ募金

昨年実施した美容師コース学生による学内サロン「salon de CHIKUSHI」を、今年度も美容専門教科の特別実習としての位置づけで、今年度は、地域の皆様に喜んでいただけるような展開を試みたいと考える。

学生において、単に知識や技術の向上だけでなく、接客に携わる職種として不可欠なコミュニケーション能力や、職業人として何を求められているのかを察知する力や、チャリティ募金による社会貢献への展開など、人格教育の面からも、教科教育の枠を超えた大きな一歩となるからである。

③ 学生ボランティア

平成 28・29・30 年度と続けて 3 回、北九州市から要請いただき、「TGC 北九州 東京ガールズコレクション」へ学生ボランティア（フィッティング スタッフ）として参加させていただいた。

これ以外にも様々なシーンで地域社会からお声掛けいただき、ボランティアとして参加した学生においては、その後の学習意欲や学生生活における意識の高さなど、非常に貴重な経験だったようである。

今年度も、美ファビ学科の学生が教科内容の特色を活かし、学生ボランティアとして参加できることがあれば是非経験させたいと考える。

平成 30 年度 教育目標の達成状況

－ 保育学科 －

「筑紫の心」をもち、豊かな人間性と確かな専門性を兼ね備え、社会に貢献できる実践力のある保育者を養成する。

1. 建学の精神「筑紫の心」を踏まえ、カリキュラム改善にともなう教育の実施

- ・本年度より新幼稚園教育要領に沿って、授業を展開していった。コアカリキュラムに情報処理を組み入れ実施できた。
- ・新保育所保育指針に基づくコアカリキュラムの見直しを行った。
- ・今年度、初めて「こども音楽療育士」の資格認定に関する実習が11月下旬から12月にかけて5日間実施された。16名の学生が「こども音楽療育士」の資格認定を受けることができた。

2 学生生活充実に向けた学科内の連携

- ・本学科では、学外実習が6回実施される。今までは実習担当教員と副手による実習への準備がなされてきた。今年度、副手の新旧交代に伴い、効率的仕事分担を行った結果、円滑に業務が進められ、学生が実習に臨めた。

また、昨年度に引き続き、教員による共同研究を進め、授業に生かした。特に、保育・教職実践演習、キャリア教育演習に関しては、教員間の連携が密となった。キャリア教育演習では2年生から1年生に向けて、学生生活、就職活動等の充実化を図るアドバイスを行った。1年生からは、具体的に2年生の話聞くことができ実習に向けての心構え、不安への軽減ができたとの感想が聞くことができた。2年生のキャリア教育演習では幼稚園・保育所・施設に勤めている本学科の卒業生に仕事内容、やりがいなどの話を聞く授業内容とした。2年生にとっては就職への取組みに対する現実的意識へとつながった。

3. 主体的・対話的な深い学び（アクティブ・ラーニング）の実現のための授業改善

- ・平成30年度から、新幼稚園教育要領、新保育所保育指針、新幼保連携型認定こども園教育・保育要領に基づいた保育が実施されている。その趣旨を十分に理解し、授業の中に生かしていくようにした。また、課程認定によるシラバスの改訂などにより、情報教育をどの授業でも積極的に取り入れていった。情報教室の環境整備にも他学科、教職員間の協力を得て授業展開を進めた。
- ・保育・教職実践演習においては、学生自身が学びたい課題を自ら見つけて、その課題を自分の力で解決するアクティブ・ラーニング形式にて授業展開を進めた。その結果、教職課程履修カルテ（自己評価シート）による自己分析の結果として現れ、自らの成長を学生が味わったと反省文に記載している。

4. 認定こども園東筑紫短期大学附属幼稚園、東筑紫学園高等学校等との連携、地域社会との交流及び社会貢献

- ・本学科は、認定こども園東筑紫短期大学附属幼稚園と授業や諸行事等で密接な連携をしている。また、学生はインターンシップを利用して、様々な幼稚園・保育所・施設への職場体験を実施し

ている。今年度は1、2年生延べ358名が職場体験をした。その結果、実習の不安解消、就職先選出に繋がった。

また、東筑紫学園高等学校とは、出前講義や学校見学を通して、本学科についての理解を得るように努力した。来年度の保育学科入学予定者は32名に達した。今後も、効果的な情報提供をしながら、連携を図っていきたい。

- ・地域社会の交流及び社会貢献については、本学科の教職員の個性を生かしながら連携協力を努めていった。学生は近隣の市民センターの子育て支援に参加した。参加した学生からは学内だけでなく学外における広い分野での学びがあったとの報告を受けた。また、幼稚園連盟の学生ボランティア要請を受け参加した。要請先からは「学生が子どもと目線を合わせて会話をしてくれた」「保護者への対応もよかった」と学生の態度に対して好評であった。

5. 在校生や卒業生への適切な支援体制の確立と休学者や退学者への削減へ向けての対策

- ・「心の悩み110番」手帳の改訂作業を行い、利用しやすいものとした。担任はもちろん、保育学科教職員一丸となって教育相談室とも連携しながら、学生の相談に応じやすい環境を整え学生指導を行った。又、特別支援の必要な学生に対して、補助的指導（補完授業）を教員が行った。
- ・就職率100%を目指し、学生部（就職指導課）等と連携し、幼稚園、保育所の詳細な実態把握をして、在校生に情報を提供した。今年度の公務員合格者は4名であった。
- ・本学科内の職務分担を見直し、教職員の協力体制を強化すると共に、クラス担任は今まで以上に学生の把握に努め、問題解決へ向けて全力で取り組んだ。また、実習担当者の複数配置（幼稚園、保育所、施設）等により、円滑な学生支援体制をつくった。
- ・クラス担任は、学生指導課・教務課・会計課・保健室・カウンセラーとの連携等と日常的に授業の欠席、授業料納入についてこま目に連絡を受け情報交換を行い、学生の些細な変化にも気付くようにした。そして、学年会議、学科会議（FD会議）で毎週情報交換に取り組んで、学生指導、保護者との面談を行った。

6. 学生の定員確保への取組

- ・東筑紫学園の「建学の精神」を踏まえて「保育学科の教育目標」「資格取得内容」等を教員間で再確認の上、高校へのガイダンスを行った。その結果として、一貫性のある説明、詳しい授業内容説明などの成果が見られた。

また、訪問先の高校に来校する際、在校している学生の状況を把握し、高校の先生方に報告をしている。高校の先生と円滑なコミュニケーションがとれ、学生数減少の折、昨年同数の入学者確保ができた。

- ・入学前のピアノレッスンについて

31年度入学内定者に対するピアノ指導を、本学科音楽教員が実施した。（入学前2月に毎年行うことで入学後のスムーズなピアノの指導へとつながっている。）今年参加者は90名で、ピアノに対して不安が少なくなったと受講学生の92%から聞かれた。

平成 31 年度 教育目標

— 保育学科 —

「筑紫の心」をもち、豊かな人間性と確かな専門性を兼ね備え、社会に貢献できる実践力のある保育者を養成する。

1. 建学の精神「筑紫の心」を踏まえ、3つのポリシーに沿った教育の実施

- ・アドミッション・ポリシー、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーを授業のみでなくインターンシップを利用することでより学生が再確認できるように検討する。
- ・保育課程を見直し、それを実施する年である。昨年度、編成したシラバスに基づいて実践を行いながら、保育者としての資質向上を図るため、本学科教職員をはじめ非常勤講師とともに本学の建学の精神である「筑紫の心」を基盤に、学生一人ひとりに応じた指導を行う。
- ・平成 30 年度初めて 16 名の学生が「こども音楽療育士」の資格認定を受けた。平成 31 年度「こども音楽療育士」の資格認定を目指す学生は 18 名である。保育実習 I と「こども音楽療育士」の実習先が同一施設で行えるように検討する。今後、実習先と実習内容の打ち合わせ、記録ノートの見直し、担当教員の研修などを行い、実習先を増やすための検討を行う。

2 教員間による連携と共同体制の推進

- ・本学科では、学外実習が 6 回実施される。これまで実習担当教員と副手による実習への準備がなされてきた。新たに、担当者が変わるために仕事分担を明確にする。
- ・基本的なマナーが欠けている学生が近年増え実習先にて指摘されることが多くなっている。学生が基本的なマナーを身に付けられるよう、キャリア教育演習においてマナーに関する講義を取り入れていく。また、日常的に全教員が指導を行っていく。

3. 主体的・対話的な深い学び（アクティブ・ラーニング）の実現のための授業改善

- ・平成 30 年度から、新幼稚園教育要領、新保育所保育指針、新幼保連携型認定こども園教育・保育要領に基づいた保育が実施されている。その趣旨を十分に理解し、授業の中に活かしていくようにする。また、課程認定によるシラバスの改訂により、情報教育をどの授業でも積極的に取り入れることが明記されている。その為の環境整備に取り組んでいく。
- ・本学科における授業研究の取組

<キャリア教育演習 I・II と保育・教職実践演習の内容の検討について>

キャリア教育 I・II を連動し、I 年次においては、手遊びや絵本の読み聞かせ等の保育技術を中心に、2 年次では学生自身が課題を自ら見つけて、その課題を自分の力で解決するアクティブ・ラーニング形式にて授業を展開し、社会貢献活動が出来る時間をもつことができるように授業内容を改善する。

- ・保育・教職実践演習は 2 年前期に自己評価をし、2 年後期に授業展開する。他の授業科目を通して身に付けてきた知識・技能を確認し、不足している授業内容を補完・向上させる。教育や保育の現場で保育者としての使命感、責任感、教育的愛情などを身に付けていくことが目標であり、学生の卒業後の進路と授業がつながる内容とする。

- ・1年1月の保育所実習で評価の低かった学生に関して、面談を行い、次回の実習に向けての細やかな助言を加え援助する。
4. 認定こども園東筑紫短期大学附属幼稚園、東筑紫学園高等学校等との連携、地域社会との交流及び社会貢献
- ・認定こども園東筑紫短期大学附属幼稚園と授業や諸行事等で密接な連携をしていく。また、学生のボランティアを利用して、様々な職場体験を実施する。
東筑紫学園高等学校とは、出前講義や学校見学を通して、本学科についての理解を得るような企画をたてる。高校生に保育の楽しさや喜びを体験してもらい、保育学科に興味関心をもつことができるように努める。
 - ・地域社会の交流及び学外活動を積極的に取り入れ、講義だけでは経験できないコミュニケーション力など実践的な学びを行う。
5. 在校生や卒業生への適切な支援の充実と休学者や退学者の削減へ向けての対策
- ・平成31年度本学の入学予定者の高校へ、連絡を取り、高校時代の学生の心身の健康状態、友人関係などの実態を把握し、学生の長所を伸ばし、充実した学生生活を送ることができるように学生支援にあたる。
 - ・本学科では、今年度も「心の悩み110番」手帳を見直し、学生の相談に応じやすい環境を整える。担任を中心に学生指導課、看護師、カウンセラーと連携を取りながら、きめの細かい学生指導を行っていく。
 - ・今後も就職活動支援の充実を図る。幼稚園、保育所、施設の情報在校生へ提供し、就職活動の手がかりとする。今後も、学生部（就職指導課）等と連携し、実態把握をして取り組みを強化していく。
 - ・本学科内の職務分担を見直し、教職員の協力体制を強化すると共に、クラス担任は学生指導課・教務課・会計課等と日常的に情報交換を行い、学生の成績や授業料未納者等の把握に努め、それに応じた適切な対応をする。また、学年会議、学科会議（FD会議）で情報交換をし、学生の動向について確認し、学生の指導に生かす。
 - ・実習担当者の複数配置（幼稚園、保育所、施設）により、円滑な学生支援体制をつくる。
 - ・非常勤講師との連携をとる。
非常勤講師と学科長、学年主任が、学生の出席状況、授業態度などに関して定期的に情報交換を図る。学年会議、学科会議（FD会議）で情報を共有し、問題に応じて対処法を検討し、学生指導に生かす。
 - ・卒業後も精神的な支えになるよう援助、指導していく。
6. 学生の定員確保への取組
- ・東筑紫学園の「建学の精神」を踏まえて「保育学科の教育目標」「資格取得内容」等を教員間で再確認の上、出前授業や学校訪問の要請に対して一貫性のある説明、詳しい授業内容説明などを行う。
 - ・オープンキャンパスの取組を全教職員、学生と一丸となっていく。
 - ・出身高校への写真レター「母校へのメッセージ」を有効活用する。

平成 30 年度 教育目標の達成状況

—食物栄養学科—

平成 30 年度教育目標として、『「建学の精神」に基づき豊かな人間性と栄養士の専門的知識を深く理解し、多様な技術を習得することで「食」をとおして人々の健康づくりに寄与し、地域社会に貢献できる栄養士を養成する』を掲げ、目標達成への課題解決に向けて様々な取組を行ってきた。

1. 教育支援の体制強化と学修の質の向上

(1) 基礎学力向上の取組

学修面の不安を抱える学生が多いため、1・2 年生ともに栄養士として必要な基礎学力の向上に取り組んだ。

入学予定者には、「入学前課題」を課し、短大の授業へのスムーズな移行と意識付けを図るとともに栄養士免許取得への目的意識の向上に努めた。

入学後は、栄養士の業務に必要な割合等の計算問題のテストを実施し、特に補講が必要な学生には、法人事務局長中村先生を講師としてリメディアル講座を開講するなど、継続した取り組みとなるよう努めた。その結果、リメディアル講座を受講したほとんどの学生は着実に理解度が上昇しており、1 年次の学生全体として基礎学力が向上したといえる。また、基礎学力が大幅に上昇した学生は前期の GPA も高く、これらの取組は基礎学力のみならず、その他の教科への意欲向上にもつながったと考える。

2 年生では、廃棄率や発注量、栄養価の計算など、実践的な計算問題に取り組ませ、基礎学力の向上を図った。その結果、廃棄率や発注量等の実践的な計算力が身に付き、応用問題についてもテキストを見て理解することが出来た。しかし、課題として、自力で解く力を身に付けさせるには、献立作成や各実習の際にも繰り返し説明を行う必要がある。これらの基礎学力向上の取組については、今後も引き続き行っていく必要がある。

(2) 再履修者及び休・退学者減少に向けた取組

学生の中には、様々な個人的・家庭的事情を背負いながら学業等に取り組んでいる学生がいる。学生が授業等に集中し無事に卒業するには、学生の置かれている状況を把握し早期の対応が求められる。そこで、学科会議等で常に情報交換を行い、学生個々の状況について教員間の共通理解を図り、保護者や学生の出身校の教諭、本学の非常勤講師等とも連携しながら学生の困りへの早期発見及び早期対応に努めるとともに、困りをもつ学生への適切な対応に努めた。この取組を通して、今年度、入学当初から学修の継続が厳しいと予想された 4 名の休学者を除き、授業や学生生活の困りによる退学者は出なかった。

(3) 特別支援教育の観点からの学生理解及び支援

特別支援教育の観点から発達障害について知識的理解を深め、対応の在り方を学ぶため FD 研修会（全体：1 回、科内：1 回）を開催し理解に努めた。

平成 30 年度入学生では、支援を必要とする学生が比較的多く見られ、中でも明らかに特別な支援を必要とする学生が 4 名在籍した。これらの学生については、担任を中心として本学のカウン

セラーや学生指導部等と連携し、学生の対応についての協議を重ね、何度も面談を行いながら支援及び対応に当たってきた。

保護者と協議を重ねた結果、この4名については現在休学中であるが、発達障害等の傾向を強くもつ学生の将来を見据え、自立した生活が出来る手段や方策をともに考え、学生が生きやすい道を選択できるよう支援することも教員の役割として必要なことであると考えている。

(4) 九州栄養福祉大学3年次への編入の養成

九州栄養福祉大学への編入希望者には、1年次より学科教員による指導及び支援を行ってきたが、今年度は編入を希望する学生が少なく、本学科からの最終的な編入学生は4名という結果であった。10名の編入枠があることから、次年度は学生の成績や実情を考慮しながら、1年次から編入の意義や心構えについての意識の醸成を図るとともに編入に向けた取組を促し、本学科からの編入希望者数の増加に努めたいと考える。

2. 社会で活躍できる栄養士養成のための支援

社会に貢献できる栄養士としての基本的資質や豊かな人間性を育む教育を充実させるために、栄養士課程の教科時間内では取り上げることが難しい内容について、キャリアアップ演習を卒業必修科目として受講させた。

1年生では、基本的な生活環境を整える「身だしなみ講座」や「性犯罪から身を守ろう」等の講座を実施した他、「就職活動に関して卒業生からのアドバイス」等の講座も実施した。学生は、どの講座も興味を持って熱心に受講しており、卒業生からのアドバイスには、活発な意見交換を行うことができ、有意義なものとなった。

2年生では栄養士実力認定試験に向けた模擬テストとその解説を行った他、卒業後の社会人として必要な「社会人のマナー」や「消費生活（カードローン等）について」等の講座を実施した。加えて「先輩に学ぶ」として栄養士業務に取り組んでいる卒業生の講話なども実施した。受講した学生のアンケートからは、どの講座も分かりやすく社会に出て活用できると答えており、学生にとって有意義なものとなった。

3. 建学の精神を理解した学校行事・生活指導への取組

学校行事への取り組みは担任を通して行事の意義や取り組み方の指導が行われ、学生は欠席もなく行事に臨んでいた。生活面の指導においては、担任を中心に個々の学生をよく把握し、学科会議で情報を共有し、学生指導課等とも共通理解を図りながらきめ細かな指導を行ってきた。「学生支援満足度・評価アンケート」における「建学の精神に基づく人格教育」や「行事教育」、「お掃除教育」についての結果は高い評価であり、行き届いた指導が出来ているのではないかとと思われる。

4. アドミッションポリシーに沿った学生募集の組織的な取組

(1) 学科オープンキャンパスの充実

高校生が本学科及び学科の学修内容に興味・関心をもち理解が深まるよう、説明資料の見直しを行い学科独自のパンフレットを作成し、ミニ実習・実験を体験させて内容の充実を図った。また日本栄養士会とも連携し、栄養士の活動についても理解を深めた。

3回のオープンキャンパスには、延べ120名の高校生の参加があり、アンケート結果では95%が「食物栄養学科に興味をもった」と答えており、取組の効果があつたと考えられる。しかしな

がら、学生募集の増加につなげるには厳しい状況があり、今後も高校生やその保護者のニーズを把握し、男女共学に向けた対応やPR活動を行うなど、内容を充実させながら学生募集につなげていくことが大切である。

(2) 学園高校食物文化科との連携強化

本学科の学生募集には、学園高校の食物文化科との連携が必要不可欠である。しかし、近年の食物文化科からの入学状況を見ると、必ずしも十分な連携ができているとは言えない状況がある。そこで、高校にて調理師免許を取得後、短大にて栄養に関する専門的知識や技能を身に付けて栄養士免許を取得し、就職につなげることができるよう、教務課等と連携して学園高校と食物栄養学科との情報交換の場を計画中である。その中で食物文化科に在籍する高校生の現状や要望等について把握し、今後の食物栄養学科への入学生増員を図る必要がある。

また、学生募集については、各校からの近年の入学状況を調査し、進学ガイダンスや出前授業を通して学生募集につなげる必要があると考える。

(3) 「北九州ゆめみらいワーク 2018」への参加

この企画は、北九州市の主催で、地元企業の仕事内容や様々な職業の紹介等を通して職業観を醸成し、各自に合った職業選択につながることを目的として開催されている。本学科へ興味・関心をもってもらい学生募集に繋げる目的で参加し、高校生が興味関心をもち分かりやすい教材を工夫するとともに、本学科の授業や実習における取組を紹介した。

2日間で約1000名の高校生が本学科の展示に来場し、取組1年目としての成果は得られたと考えられる。次年度も取組を継続し、学生募集につなげる必要があると考える。

5. 職業意識の確立へ向けた就職活動の支援

(1) 認定こども園東筑紫短期大学附属幼稚園との連携

本学科は保育園栄養士の求人が多く、保育園の就職を希望する学生も多いため、附属幼稚園と連携した親子料理教室に学生を参加させ、幼児の発達段階や食べ物の嗜好などについて理解を深めさせ就職活動に繋げた。

また、保育園栄養士の仕事内容を学ぶことを目的とし、学生が附属幼稚園認定こども園に出向いて集団給食の食事作りの体験をさせた。学生からは、食べる側の園児のことを考えながら様々な工夫を行うことの大切さ等を実感し貴重な体験を積むことができた、就職後のイメージや手応えを掴むことができたなどの感想が聞かれ、職業意識をもって就職活動を行う上での一助となった。

(2) 食物栄養学科卒業生との交流会

キャリアアップ演習Ⅰ・Ⅱにおいて、社会における栄養士活動を学ばせ、職業意識の確立や就職活動の一助とする目的で、食物栄養学科卒業生との交流会を計画した。卒業生は、分かりやすい資料を準備しており、後輩たちへの思いも感じ取れた。受講生の感想からは、先輩の貴重な体験談やアドバイスがとても参考になった、栄養士としての具体的な仕事内容が分かった、などの感想が聞かれ活発な質問もがでるなど、学生にとってとても有意義な交流会となった。来年度も是非継続していきたい。

平成31年度 教育目標

— 食物栄養学科 —

<教育目標>

「建学の精神」に基づき、豊かな人間性を育み、栄養士の専門的知識と多様な技術を習得することで、「食」とおして人々の健康づくりに寄与し、地域社会に貢献できる栄養士を養成する。

1. アドミッションポリシーに沿った学生募集の組織的な取組

学生募集については、今年度の重点課題である。学科教員が同じ認識を持ち、共通理解を図りながら学生募集に取り組む。

(1) 学園高校食物文化科との連携強化

① 高校生や保護者のニーズの把握

近年、学園高校食物文化科からの入学生が減少の傾向にあり、その対策にはまず高校生やその保護者のニーズを把握することが必要である。学園高校食物文化科の学級担任や進路担当教諭と情報交換の場を設定し、生徒の進路の現状や保護者のニーズ等を把握して、学生募集増加の糸口をつかむ。

② 食物栄養学科単独の説明会の実施

毎年定期に実施される出前講義とは別に、食物栄養学科教員による単独の学科説明会を開催する。その中で、これからの社会における栄養士の必要性や仕事内容、活躍の場、調理師と栄養士の違いなど栄養士の魅力について、分かりやすく視覚的な資料を作成して説明を行い、栄養士免許を取得する意義について生徒の理解を得る。

③ 栄養士への興味・関心を高める「親子ふれあいクッキング」の実施

高校の食物文化科と連携した行事として附属幼稚園での「親子ふれあいクッキング」を実施し、栄養士への興味・関心を高める。在学生及び高校生主体で行い、栄養士業務の指導の一端を経験することにより、食物栄養学科への理解を深める。

(2) 各高校における出前講義・進学ガイダンスの充実

学生募集においては、出前講義や進学ガイダンスの充実が大切である。それには、各高校の実情について共通理解し、高校生にとって分かりやすい視覚に訴えるような資料を作成し、栄養士免許取得の魅力について理解を深めてもらうことで学生募集につなげる。

(3) 学科オープンキャンパスの充実

高校生が本学科の学修内容に関心・興味をもち理解が深まるよう、説明資料の見直しを行うとともに、学科独自のパンフレットを作成する。また実習・実験等の体験を行い、学生が考案したスイーツの試食並びに学生目線による学科の魅力や特徴等の説明を行うなど内容の充実を図る。また実験・実習サポート役の学科在学生との触れ合いを通して、本学科への興味・関心を深める。

(4) 男女共学に向けてのカリキュラムの見直しの検討

本学科は、2019年度から男子学生の募集を行っている。男女ともに栄養士免許を生かした職業

につなげられるような新たな資格取得やカリキュラムの見直しについて検討を進めていく。

(5) 「北九州ゆめみらいワーク 2019」への参加による本学科への関心度の向上

この企画は、地元企業の仕事内容や様々な職業の紹介等を通して職業観を醸成し、各自に合った職業選択につながることを目的として開催されている。

今年度もこの企画に参加し、本学科の授業や実習における取組を紹介することにより、本学科への興味・関心をもってもらうとともに入学志願者数の増加に繋げる。また、日本栄養士会とも連携し、栄養士活動についての理解や周知を図り学生数の増加を図る。

このような取組を通して、入学者数の数値目標として、定員の70名を確保したいと考える。

2. 教育支援の体制強化と学修の質の向上

近年、学修面の不安やコミュニケーション不足、さらにキャリアへの不安を抱える学生が多くみられることから、それらを解消する手立てが必要である。

さらに休学・退学者の減少に向けて、学生の目線に立った学修内容や生活面等の指導及び充実した学生生活のための支援体制が必要である。

(1) 基礎学力の向上

学修面の不安を軽減し、実践力のある栄養士を養成するには、栄養士として必要な基礎学力の定着が必須である。

1年次では「入学前課題」を実施し、短大の授業へのスムーズな移行を図るとともに、解説を行って知識の定着を図る。また学生全員を対象に栄養士の業務に必要な「栄養士のための基礎数学演習」を実施して、補講が必要な学生を対象に、リメディアル講座や個別指導を継続して実施する。この講座や個別指導の結果を踏まえながら、栄養士業務に必須である計算力の向上を図るとともに、基礎学力の底上げを図る。

2年次には「栄養士のための基礎演習」として、廃棄率や発注量、栄養価の計算など、実践的な計算問題に取り組ませる。

栄養数学のテキストを作成し、全員を対象に確認テストを行い、補講が必要な学生にはリメディアル講座を実施する。さらに、食品成分表を使った実践的な問題にも取り組ませ、到達基準に達していない学生には補講や個別指導を実施するとともに、各教科での指導も併せて行う。

これら2年間を通じた系統的な指導を継続して行うことにより、栄養士業務に必要な計算力の定着を図る。

(2) 再履修者及び休・退学者減少に向けた取組

再履修者及び休・退学者をなくすには、担任や教科担当等による学生の状況把握と早期の対応が求められる。

① 困りをもつ学生の早期発見・早期対応

欠席・遅刻が目立つ学生や課題が未提出の学生等について、学科会議等で情報を共有して共通理解を図り、困りをもつ学生の早期発見に努める。また、担任による学生への面談や保護者との連携による早期対応に努める。さらにオフィスアワー等を活用して教科担当による学生への指導も行い、きめ細かな対応に努める。

② 非常勤講師との情報交換会の開催

非常勤講師との情報交換会を年1回開催し、学生の実情に合わせた授業内容や定期試験に向けた

対応等について協議し、共通理解を図りながら組織的な対応を行う。

(3) 分かりやすい授業の工夫

学生の興味・関心を引き出しながら分かる授業を行うには授業の工夫も大切である。授業の目的や必要性を明示し、授業の速度や字の大きさや記入する文字の量を考慮し、分かりやすい説明を行って、学生のレベルに合わせた授業展開を行うことが大切である。

(4) 特別支援教育の観点からの学生理解及び支援

発達障害に関する知識とその対応等について、本学のカウンセラーを講師として研修会（FD 研究会）をもち、特別な支援を要する学生への理解とその対応について継続して学ぶ。また、特別な支援を要する学生の対応については、保健室や学生指導課と連携を密に取りながら、学生に寄り添った支援に当たる。

(5) アセスメントポリシーに基いた学生支援

建学の精神に基いた学生生活への取組と目標達成のために、学生の思いや希望、生活習慣等を適切に把握し、学生に寄り添った支援を行うことを目的に、アセスメントポリシー対応として学生調査票を作成し、学生面談や学生指導の際に生かす。

(6) 九州栄養福祉大学3年次への編入の養成

九州栄養福祉大学への編入に向けて、担任等による面談の際に学生の状況を把握し、1年次より学科教員による指導及び支援を行って編入の心構えや意識の醸成を図る。また2年次の当初より、学生の実情に応じて編入に向けた取組を促し、本学科からの編入希望者数の増加に努める。

3. 社会で活躍できる栄養士養成のための支援

本学科の卒業生は、医療関係、福祉施設、小学校、保育園などにおいて、給食の提供や健常者への健康増進のための栄養指導など活躍の場を広げている。社会に貢献できる栄養士としての資質や豊かな人間性向上のための教育・支援が必要である。そのため、1年・2年ともに、栄養士課程の教科時間内では取り上げることが難しい内容を盛り込んだ「キャリアアップ演習Ⅰ・Ⅱ」を卒業必修として開講する。

1年生では、基本的な生活環境を整える「身だしなみ講座」や「性犯罪から身を守る」等の講座の他、就職活動についての意識付けを行うために「就職活動に関して卒業生からのアドバイス」等の講座も実施する。

2年生では、学科教員による栄養士実力認定試験に向けた模擬テストとその解説を中心に取り組む。また卒業後の社会人として必要な「社会人のマナー」や、栄養士業務で就職している卒業生を講師とした講座「先輩に学ぶ」等、教科の時間では取り上げることが難しい内容について、キャリアアップ演習を卒業必修科目として受講させ、学科教員が共通理解を図りながら取り組んでいく。

4. 建学の精神を理解した学校行事・生活指導への取組

建学の精神に基づく行事教育、生活指導教育は、入学式の保護者説明会、オリエンテーション、キャリアアップ演習、ホームルームなどを通じて機会あるごとに理解を促す。特に生活指導に関する教育は栄養士養成の上でも重要であり、社会に奉仕できる人間力や実践力を身につけさせるには、まず、教員が建学の精神を十分理解し、授業等を通して指導していくことが大切である。

5. 職業意識の確立へ向けた就職活動の支援

(1) 認定こども園東筑紫短期大学附属幼稚園との連携

保育園栄養士の求人が多く、保育園の就職を希望する学生も多いため、附属幼稚園での親子料理教室に参加させ、幼児教育についての理解を深め就職活動に繋げる。

(2) 食物栄養学科卒業生との交流会

食物栄養学科で取得できる免許や資格を生かした職業に就いている卒業生との交流会を計画し、情報交換を通して社会における栄養士活動や社会人としての役割等を学ばせ、職業意識の確立や就職活動の一助となるよう計画する。

さらに本学科が地域貢献の一つとして続けている北九州市立年長者研修大学校周望学舎の実習にも学生の参加を促し、体験の機会を増やし支援を広げる。

平成 30 年度 教育目標の達成状況

— 専 攻 科 —

「建学の精神」の理念を育み、地域社会に信頼され貢献する介護福祉士の育成を目指し、専門教育ならびに社会性の修得を教育目標とする。

1. 学生確保に向けた対策の強化

① 保育学科との連携

専攻科への進学者数は減少傾向であり、入学者の確保は重要な課題である。本年は、専攻科の認知度向上に向けた情報の発信及び保育学科学生へのアプローチに関して尽力した。

具体的には、リーフレットの配布、学内へのポスターの掲示、保育学科学生へのガイダンスや交流授業、意識調査（アンケート調査）を実施した。ガイダンスでは専攻科生がライブ映像を活用するなど、専攻科の魅力や福祉の心を主軸にしたプレゼンテーションを発信した。ガイダンス終了後に保育学科2年生を対象とした意識調査を実施したところ、33%（回答者102名のうち34名）の学生から「進学してみたい」との回答が得られたが、進学者数は数名に留まっている。

今年度の取り組みを踏まえ、次年度は、①情報発信の時期や回数、②発信する情報の内容（認知度や関心を高める内容）、③保育学科と専攻科双方向の情報交流のあり方等に関して具体的に検討、展開を図る所存である。

② リーフレット等案内資料の作成

情報発信の案内資料としてリーフレットを作成し、保育学科の学生やオープンキャンパス、大学祭等において配布した。案内資料の内容や配布の時期について検討を重ねながら、引き続き専攻科の魅力を感じる情報の発信に努めていきたい。

2. 職業人としての倫理的自覚への取り組み

① 社会規範を理解し、幅広い教養を養う — クラス運営の取り組みと評価 —

入学後のオリエンテーション時に、専攻科で作成した‘学生生活の心得’を配布し、学生生活を送る上で守ってもらいたい内容を伝えた。‘筑紫の心’に基づき、年間を通して社会人として必要とされる礼節や規範、社会常識などの具体的な内容の指導を行うも、一部、「ほうれんそう」が徹底できない等、全学生における社会性の定着は困難であった。いかにして個々の学生が社会性を習得していくか、様々な方策を検討しながら、チェックシートの活用や個別の評価、指導も含めて取り組んでいきたい。

② 就職活動への支援

本科では、日頃より、保育や介護福祉の現場について学生と対話を行いながら、就職活動への意識を高めている。本年は、就職したい分野を絞るため、前期・後期に就職希望アンケートや卒業生の講話を実施した。また、個別支援として面談を実施し、就職希望先に関する情報収集や適切なマッチングに努めた結果、全員が希望先へと就職が決まった。次年度も、学生の意向を大切にしながら就職活動に関する支援を充実させ、それぞれが望む就職先へとつなげていきたい。

3. 専門的な知識・技術の体系的な修得

① 授業内容の充実と教員間の連携

科内会議や毎朝のミーティングで、学生状況や授業内容等の情報共有を行った。学習の理解度や学生の特性を共有でき、個々の学生に応じた指導ができたと考えられる。

また、科内用の業務分掌を明確化することで、各教員が自らの役割を認識し充実した連携が図れたと思われる。

② 国家試験受験対策の強化（表1参照）

国家試験受験に関する取り組みは重要課題と位置付けており、昨年度と同様に夏季講習、補習講義、課題の配布、模擬試験を実施し内容を強化している。

新たな今年度の対策として、1)成績分析表と個別成績票の作成、2)個別学習指導の強化を図った。成績分析表（各模擬試験15回分）では学生の不得意な科目が明示され、各教員が重点的に対策授業や個別指導を実施することができた。また、各学生には個別成績票（表1）を配布し、自身の成績の伸び率の確認や不得意分野の自覚を促すなど、自主的な学習への後押しを重視した。成績が伸び悩む学生には個別指導等の強化を図ったが、広範囲にわたる内容の習得に至れず、課題が残る結果となった。

今年度のふり返りとして、学生一人ひとりに応じた個別支援のあり方が課題であったと受け止めている。早期に学生の特性を理解し、個々に適した指導方法の分析と支援の必要性を認識した。併せて、成績が伸び悩む学生に対しては保護者の協力が不可欠であると考えられ、学業及び学生生活の状況について連絡をとり合い、学力向上や学習環境の保持についてサポートしていくことが大切である。

これらの課題に対応しながら、引き続き受験対策のスケジュールの可視化、学習方法の教授について検討を深め、教員間の連携のもとに国家試験対策に尽力する所存である。

（表1）個別成績票 ※数字は架空の点数

【 個別成績票 】																			
科目名		A問題(68問)									B問題(57問)							総計	
		領域:人間と社会(16問)				領域:介護(52問)					領域:こころからのしくみ/医療的ケア/総合問題(52問)								
		人間の尊厳と自立	人間関係とコミュニケーション	社会の理解	小計	介護の基本	コミュニケーション技術	生活支援技術	介護過程	小計	A問題集計	発達と老化の理解	認知症の理解	障害の理解	こころからのしくみ	医療的ケア	総合問題		B問題集計
問題数	2	2	12	16	10	8	28	8	52	68	8	10	10	12	5	12	57	125	
No.	氏名	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱
1		2	1	4	7	5	7	21	8	39	46	5	8	4	8	4	5	34	80
percentage		100.0%	50.0%	33.3%	43.8%	50.0%	87.5%	80.8%	75.0%	57.5%	67.5%	62.5%	80.0%	40.0%	66.7%	80.0%	41.7%	59.5%	64.0%

③ 主体的学習促進のための環境づくり

「筑紫の心」の知性を育み自ら学ぶ姿勢を身に付けるため、入学直後の学外研修、学外授業、事例研究発表会等を実施した。授業展開としては、視覚的資料への転換や介護実習室の活用を試行している。

国家試験対策では、「〇〇の分野の解説をしてほしい」といった主体的な学習意欲がうかがえたが、一部学生は受験対策に取り組む意欲が継続しない状況が見られた。

今後も、自主的な学習意欲を育むべく、わかりやすい授業の展開やアクティブラーニングの充実に尽力していく。また、学生一人ひとりの特性を配慮し、個別の相談や学習支援に力を注いでいきたい。

4. 「筑紫の心」に基づいた地域社会に信頼され貢献する人材の育成

① 「筑紫の心」を養う取り組み

行事に関しては、年間を通して無断で欠席や遅刻をすることなく全員が参加できた。行事教育の意義などについて指導を行ったことにより、学生一人一人が責任をもって自らの役割を認識し、チームの一員としての行動することができたと考えられる。清掃活動では、分担制をとり担当区域の掃除に日々取り組んできた。前期・後期の授業終了時には全学生で教室と実習室の清掃を行い、学生同士で協力しながら積極的に掃除を行う姿がみられた。しかし、毎日の清掃活動では掃除をしない学生や清掃内容が不十分になることも見受けられるため、今後は各学生が自己の役割や責任を自覚できるような指導を徹底したい。

② 地域社会との連携・交流

ボランティア活動への啓発として、北九州市や社会福祉施設からの情報案内を発信している。本年は学生10名のうち4名が活動に参加し地域の方々との交流の機会をもった。また、本年度は県の委託事業である「介護の仕事理解促進事業」に計3回参加し、専攻科の学生が高校生との交流を通して介護の魅力を伝える活動を実施した。北九州市のゆめみらいワークにも出展するなど、専攻科の紹介とともに介護福祉を通じた多様な交流を図ってきた。

次年度は、より多くの交流機会を検討し、学生の主体的参加を通して地域社会への理解を促していきたい。

平成31年度 教育目標

— 専攻科 —

「建学の精神」の理念を育み、地域社会に信頼され貢献する介護福祉士の育成を目指し、専門教育ならびに社会性の修得を教育目標とする。

1. 専門的な知識・技術の体系的な修得

① 授業内容の充実と教員間の連携

介護福祉の専門性修得に向けて、知識、技術の定着はもとより、対人援助における倫理観、社会性、主体性を培うために授業内容の充実を図る。具体的には、各教科の学習内容が連動し融和的な理解につながるよう、教員相互の情報共有と授業内容のすり合わせに取り組む。また、様々な学生の特性を尊重しつつ、一人ひとりと向き合いながら柔軟な教育活動の展開を図る。

② 国家試験受験対策の強化

国家試験の受験は専攻科で既習した知識、技術の統合化であり、重要な学業と位置づけている。学生が主体的に受験対策に励み100%の合格率を目指すべく、学習意欲の向上に努め、受験対策を計画、実施する。成績が伸び悩む学生に関しては、個別の学習支援の強化とともに、保護者と連絡を密に取り合い理解と協力に関して働きかけていく。

③ 主体的学習促進に向けた環境づくり

自らが目指す分野の専門性に関心を抱き主体的に学ぶ姿勢を育んでいくために、責任を持って積極的に行動する場を増やしていく。具体的には、国家試験対策や介護実習、研究報告会の充実に取り組み、また、図書館の活用や学外での演習・学習の機会も大切な学びの場として充実を図っていく。

2. 社会性の育成に向けて

① 社会規範を理解し幅広い教養を養う

社会人として必要な礼節や規律性の定着を目指す。また、他者への理解や周囲との協調性を配慮できる人材の育成に向けて、チェックシートを活用し指導を実践する。

② 就職活動への支援

就職支援として、フィールドワークや卒業生の講演を設ける等、専門的意識を高めるような機会を増やし、就職活動への連動を促す。教職員間及び卒業生や施設職員と連携を図り、学生の就職相談に適宜対応する。

3. 「筑紫の心」に基づいた地域社会に信頼され貢献する人材の育成

① 「筑紫の心」を養う取り組み

「筑紫の心」の本質を理解し、実践に結び付けることができるように日頃より啓発を心がける。清掃活動や行事等については、参加する意義を伝え、自己の役割を理解し責任ある行動ができる学生の育成を目指す。また、他者に対する思いやりや優しさ、コミュニケーション力を身につけ、

筑紫の四つの心が調和し根付いていくための教育活動に尽力していく。

② 地域社会との連携・交流

幅広く福祉の視野を広げ社会貢献の意識を培うために地域交流の場を設けていく。ボランティア活動に関する情報発信と参加の調整、支援、その他、専攻科及び介護福祉の魅力を発信していく機会や多世代との交流等を通して、地域社会に信頼され求められる人材の育成を目指していきたい。

4. 学生募集に向けた対策の強化

① 保育学科との連携

専攻科へ進学する学生が減少傾向であることから、学生募集に向けた保育学科との連携を重要課題とする。方策として、1) 保育学科教員と情報共有を重視した協力体制の構築、2) 保育学科の学生へのガイダンスの充実、3) 保育学科・専攻科の学生交流の機会や交流授業の実施、4) 保育学科学生の意識調査の実施について具体的に検討を重ね実施に向けて取り組んでいく。介護福祉士の社会的役割の重要性や業務の魅力を伝えながら、進学希望者の増加につなげていきたい。

② 情報発信の展開

専攻科を案内するリーフレットを配布し、学内の掲示板にはポスターを掲示する。ホームページでは、科の雰囲気や学生生活が伝わるように、日々の新しい情報の発信に努めていきたい。オープンキャンパスやゆめみらいワークの機会も重視し、専攻科の認識や介護福祉への理解に向けた情報提供に取り組んでいく。

5. 3つのポリシー

・アドミッションポリシー

建学の精神（勇気・親和・愛・知性が調和する人間性を養う人材教育）に賛同し、高齢者や障碍のある方々を理解し、福祉を担う人材として活躍を考えている人。

・カリキュラムポリシー

高齢者や障碍者（児）まですべての人のケアができるような介護福祉士の養成を目指し、対人援助者としての基礎となる専門性に加え、教養や倫理的態度を養う。

・ディプロマポリシー

本科所定の単位を修得し、介護福祉士の国家試験に合格する学力を身につけ、さらに介護福祉士としての知識や技術・倫理観を備え、地域社会に貢献できる人材を輩出する。

平成 30 年度 達成状況

— 学 生 部 —

本年度の学生部における重点課題は、I. 学生支援・教育指導体制の強化・充実、II. 学生部業務の改善及び情報化の推進の2つを柱とし、学生指導課及び就職指導課それぞれで具体的な活動目標を掲げ実践した。以下、本年度の業務内容の達成状況について報告する。

【学生指導課】

1 学生生活の充実・支援

① 学生生活の規範の確立

□学生及び教職員に対する行事教育・人格教育の意義や意味の共通理解への取り組み

本年度も昨年度までと同様に充実した行事教育・人格教育が行えるように、学生委員会での反省事項等を確認・協議しながら業務改善に努めた。また、必要に応じて各学科との連絡・相談等を行い、行事教育の意義や意味を共有した。昨年度に引き続き全学的な行事は、南区キャンパスを含めた複数会場へのLIVE配信を実施し、限られた施設・設備の中で効果的な行事運営を実現できた。

□学生の休退学に関する原因の分析及び各学科との協同連携による防止対策の推進

昨年度までと同様に、各学科のクラス担任を中心に担当学生の授業出席状況を適宜確認し、遅刻・欠席が目立つ学生に対しては、保護者を含めて連絡・面談などを実施してもらうことで、休退学に陥りそうな学生の早期把握・対応に努めた。また、現在休学中の学生への定期連絡や相談対応など、学生の復学に向けての取り組みの推進・強化を図った。

なお、本年度から情報管理センターが構築した「授業欠席回数表」を利用することで、学生の授業出席状況をよりの確かつ効果的に把握できるようになった。

今年度状況：(2月7日付、GAKUENシステムより)

休学：45件(管：7、理：11、作：14、美：4、保：2、栄：7、専：0)

退学：14件(管：1、理：8、作：2、美：0、保：1、栄：2、専：0)

② 学生相談・支援体制の確立

□特別に配慮が必要な学生への組織的な対応

特別に配慮が必要な学生に対する案件は、個々に異なり、課題も多様であるので、個別に協議・対応した。具体的には学生部長、次長、看護師、カウンセラー、当該学科長及び担任等による情報共有及び学生指導上に関する問題点や配慮すべきことなどについて慎重に協議・検討し、学生指導に役立てた。

③ 学友会活動の活性化

□キャンパス間学生交流の実現と学友会執行部の体制強化

本年度は、例年実施している「種蒔き祭」「収穫祭」といった学内農園行事でのキャンパス間学生交流は実施したものの、学友会執行部を中心とした交流は実現できなかった。

学友会執行部については、学友会執行部員の積極的な募集活動によって、昨年に引き続き多くの新入生部員（大学 18 名、短大 15 名）を確保することができ、体制強化に繋がった。現在の総部員数は、大学 33 名、短大 20 名である。また、例年同様に九州地区大学体育協議会主催のリーダーズトレーニング（10/6-8 於熊本市）や福岡県下執行部交流会（FEL）（8/24 於本学）への参加に加え、本学独自の「リーダーズトレーニング合宿」（3/3-4 宗像市 グローバルアリーナ 大学 18 名）で、執行部学生としての役割・心構えなどの涵養を図った。

2 危機管理及び業務管理体制の構築

① 学生寮、食堂（カフェテリア）、売店（ショップ）に対する連携強化

□学生寮における健康・衛生管理の徹底

寮監との連携を密にし、健康・衛生管理の徹底を図ることで、食中毒や感染症などの集団発生を未然に防止できた。学生寮については、引き続き寮監との連携を密にし、健康・衛生管理の徹底を図った。特に、冬場のインフルエンザや感染性腸炎等の発症を未然に防ぐため、寮生に対してはインフルエンザワクチンの予防接種を推奨するとともに、手洗い・うがいの励行を周知・徹底した。

□食堂（カフェテリア）及び売店（ショップ）に対する衛生管理及び学生満足度の向上

学生部及び栄養学関連の専門教員とともに、委託業者を交えて食堂及び売店の運営に関する協議を実施した。主には、衛生管理の徹底に努めることや、学生のアンケート調査結果に基づく意見・要望等に対する検討を行い改善した。学生部及び栄養学関連の専門教員とともに、新規委託業者を交えて食堂及び売店の運営に関する協議を実施した。主には、食中毒予防などの衛生管理の徹底に努めることや、学生のアンケート調査結果に基づく意見・要望等に対する改善策などについて協議・検討した。その結果、調理・配膳方法の工夫や食事提供開始時間の繰り上げ、売店（ショップ）での参考書販売など学生の満足度の向上へ向けた取り組みをし、効果を上げた。

② 危機管理体制の構築

□災害時の緊急連絡（メールやホームページを通じて）の構築

クラス担任を通じた緊急連絡体制を継続しつつ、学生支援システム「UNIPA」上の掲示及び本学ホームページを効果的かつ迅速に活用することで、全学的な周知がなされた。

□危機管理マニュアルの構築

平成 28 年度より手掛けてきた危機管理マニュアルの取りまとめが完了し、「九州栄養福祉大学・東筑紫短期大学危機管理基本マニュアル」として全学的に周知することができた。本危機管理基本マニュアルは、全学的に対応すべきリスク管理の標準的プロセスの提示及び個別マニュアル作成時の参考となるように策定している。

③ 防犯体制の構築

□学生委員会及び庶務課との連携による盗難等の被害防止対策の強化

学生委員会にて学生の盗難被害の防止策を協議・検討し、学生自身の貴重品管理意識の徹底を図るとともに、設備面を含めた防犯体制・環境設備の強化を図った。本年度は、死角となる箇所（2 号館 1F 出入口：1 号館側の鉄扉付近）や学友会館の出入口へ防犯カメラを設置し、防犯体制の強化を図った。

④ 事務処理作業の効率化

□IT 技術および OA 機器等の積極的な活用

学生支援システム「UNIPA」及び「GAKUEN」への対応に伴う業務の効率化や作業量の軽減に向けて、業務マニュアルの見直し・改訂を行った。また、本システムによる「学生写真台帳」「学生健康診断データ一覧」などの帳票を作成した。また、本学ホームページ上のコンテンツについては、リニューアルに伴い全ての内容を改めて見直し、刷新した。

□業務内容の見直し・改善

課員の更なる資質向上及び人材育成のため、学内外を問わず SD 研修会等への積極的参加を促進した。また、両（北区・南区）キャンパス間における職員同士の連携体制の強化を図った。

また、本年度も昨年度に引き続き奨学金関連業務の効率化及び作業量の軽減に向けて、各種マニュアルの改訂及び業務内容の見直し・改善を図った。

□学友会経費の効果的な配分

学友会経費支出については、クラブ顧問・部長会議等にて全学的な（学生及び教職員の）共通理解を図ったことで、大きな混乱やトラブルもなく、概ね当初予算計画の範囲内で学友会活動の経費的な部分の支援を実現できた。

【就職指導課】

1 公務員への意識向上

学生の早期からの意識改革と、適切な情報提供、きめ細かな連携をとり、さらなる実績向上に取り組んだ。その結果、今年度も公務員合格者が卒業生も含めて 12 名 12 件であった。募集人数が少ない市区町村でも合格が出ており、本学の強みの一つとして今後も実績を増やしていきたい。

① 学生の公務員希望状況の把握と受験状況の管理

各学科と連携を取り、公務員希望状況を調査した。地域希望も調査を行い、学生の競合を少なくした。受験時に必ず就職指導課に申込書の提出をするように指導し、公務員講座委託企業とともにリアルタイムに指導できるようした。

② 情報力の向上

教職員が公務員受験に関する情報力を向上できるよう、勉強会や情報収集の共有に取り組んだ。公務員試験や講座、模試などの情報や出欠状況をメールや SNS（ツイッター）等で学生及び教職員へ情報提供を行なった。

③ 相談支援体制の充実

学生からの就職相談に対して、相手の立場に立って傾聴する力をつけ、履歴書、エントリーシート及び小論文等について、就職指導課員はもちろんのこと、短大 2 年担任、大学 4 年担任まで、同じレベルで支援、指導ができるようにした。平成 30 年度中に各学部・学科就職情報交換会を実施できた。

2. 就職支援講座の実施

就職指導課と各学科で連携を取り、特にマナー講座を中心に実施を計画した。就職対策特別講座を前期及び後期に実施できた。

3. 地元の法人との連携と更なる開拓

地場法人の更なる開拓→スキル・マナー等を身に付けた本学学生の就職→継続的な求人への依頼や地場大手法人への就職数増加の好循環のサイクルを確立できるよう準備を進めた。

また、地方創生を支援できるよう、地元法人と連携し、就職先の地元定着を高められるよう連携をとった。

以下の会合に参加。企業担当者と挨拶し、情報交換を積極的に行なった。

- ① 合同企業説明会（計 14 回）
- ② 自治体主催の情報交換会（計 6 回）
- ③ COC+（北九州・下関まなびとぴあ）
- ④ 北九州市私立幼稚園連盟、北九州市私立保育園連盟、北九州市保育所連盟との連携
- ⑤ 卒業生への進路先状況調査

平成 30 年 3 月卒業生の内、就職した学生全員にアンケートを発送

進路先の状況を掴み、その情報を在校生に提供することで、進路指導の質の向上を図った。

4. 就職指導課の目標達成による効果について

- ① 進路決定率の向上・・・(進路決定状況) 3月25日時点

大学	食物栄養	75%	(昨年度 87%	-86%)
短大	美容ファビ	79%	(昨年度 69%	+106%)
	食物栄養	88%	(昨年度 82%	+101%)
	保育	99%	(昨年度 87%	+108%)
	専攻	100%	(昨年度 71%	+141%)

- ② 求人数（2月末時点）

・平成 30 年度 大学 2193 件、短大 7713 件（美ファ 2408 件、保育 4110 件、食栄 1195 件）

※全学科で求人票の件数は昨年度と比較して大幅に増えた。

- ③ 就職支援システム利用状況の向上

学生・教職員へのわかりやすいマニュアルの作成と運用を行った。また、オリエンテーション時にも新就職支援システムの活用方法を説明し、更なる利用向上、就職支援の強化に努めた。

4 月のオリエンテーション時に、新就職支援システムのマニュアルを作成し、全学科に配布した。

就職対策特別講座でも 5/31（木）「Web アプリケーションによる就職活動の進め方」を講義した。

学生の志望度が高い求人票が届いた際は、「UNIPA」通じて、個別に学生へ連絡した。

昨年度までの就職支援システムから、今年度は「UNIPA」に変更となったため、昨年度との比較はできないものの後期（9/14～1/25）で、2253 回の企業検索が行われた。（1 日あたり平均 16.8 件）着実に、学生の利用が増え、「UNIPA」が浸透してきた。

- ④ 就職支援に対する学生の満足度

例年実施の法人本部の事務局満足度調査アンケート内の「就職指導課」について、

（満足している）43%、（やや満足している）14%、（普通である）40%、合計 97%

就職支援に関しては、複数年の継続した施策の実施の積み重ねにより結果をもたらすため単年の実施だけでの検証は難しいが、着実に次の段階へ進みつつある。

平成 31 年度 年度目標

— 学 生 部 —

本年度の学生部における重点課題は、I. 学生支援・教育指導体制の強化・充実、II. 学生部業務の改善及び情報化の推進の2つを柱とし、学生指導課及び就職指導課それぞれで具体的な活動目標を掲げ実践する。

【学生指導課】

1 学生生活の充実・支援

① 学生生活の規範の確立

□学生及び教職員に対する行事教育・人格教育の意義や意味の共通理解

本年度も昨年度までと同様に本学の建学の精神に基づいた行事教育・人格教育の意義や意味を学生及び教職員に十分理解してもらえるように学生委員会等を通じて繰り返し指導する。また、必要に応じて各学部・学科との連絡・相談等を行う。

また、新講堂・体育館にて実施予定の入学式・始業式をはじめとする各種の全学的行事を支障なく運営するために緻密な計画を立案し、実施する。

□学生の休退学に関する原因の分析及び各学部・学科との連携による防止対策の推進

昨年度同様に、学生委員会等を通じて、各学部・学科との連携強化を図る。クラス担任を中心に担当学生の授業出席状況を適宜確認する。遅刻・欠席が目立つ学生に対しては、保護者を含めて連絡・面談などを実施することで、休退学に陥らないよう早期把握・対応に努める。また、現在休学中の学生への定期連絡や相談対応など、学生の復学に向けての取り組みの推進・強化も図る。

② 学生相談・支援体制の確立

特別に配慮が必要な学生に対する案件を個別に協議・対応する。具体的には学生部長、次長、看護師、カウンセラー、当該学科長及び担任等による情報共有及び学生指導上に関する問題点や配慮すべきことなどについて慎重に協議・検討し、学生指導に役立てる。本年度は、今までの事例や経験を活かしながら、学科単位に学生部所属の看護師、カウンセラーによる事例検討会を実施し、特別に配慮が必要な学生に対する適切な対応方法などの共通理解を図るようにする。

③ 学友会活動の活性化

学友会において、キャンパス間学生交流の実現と学友会執行部の体制強化を図る。

また、学友会執行部を中心とした「交流会」や「リーダーズトレーニング合同合宿」などを企画・立案し、引き続き、大学と短大、小倉北区キャンパスと小倉南区キャンパスとのより一層の交流を図る。

2 危機管理及び業務管理体制の構築

① 危機管理体制の構築

□災害時の緊急連絡（メールやホームページを通じて）の構築

クラス担任を通じた緊急連絡体制を継続しつつ、学生支援システム「UNIPA」上の掲示及び本学ホームページを効果的かつ迅速に活用することで、全学的な周知を図り、その課題について改善を図る。

② 防犯体制の構築

□学生委員会および庶務課との連携による学内における盗難等の被害防止対策の強化

学生委員会で学生の盗難被害の防止策を協議・検討し、学生自身の貴重品管理意識の徹底を図るとともに、設備面を含めた防犯体制・環境設備の強化を図る。特に本年度は、新築された講堂兼体育館及びカフェテリア並びにショップについての防犯体制を構築する。

③ 事務処理作業の効率化

□IT技術およびOA機器等の積極的な活用

学生支援システム「UNIPA」及び「GAKUEN」への対応に伴う業務の効率化及び作業量の軽減、ペーパレス化等に向けて、業務マニュアルの見直し・改訂を行う。特に、本年度は、業務の効率化及び作業量の軽減に向けて、耐久年数を経過し故障やトラブルの多いOA機器（コピー・FAX複合機）の刷新を検討する。また、ホームページのコンテンツについて、定期的に見直し、最新情報をタイムリーに配信することに心掛ける。

□業務内容の見直し・改善

課員の更なる資質向上及び人材育成のため、学内外を問わずSD研修会等への積極的参加を促進する。また、両（北区・南区）キャンパス間における職員同士のコミュニケーションを密にし、業務内容の共通理解を図り、連携体制を強化する。本年度も昨年度に引き続き奨学金関連業務の効率化及び作業量の軽減に向けて、各種マニュアルの改訂及び業務内容の見直し・改善を図る。

④ 学生寮、カフェテリア、ショップに対する連携・強化

□学生寮における健康・衛生管理の徹底

学生寮については、引き続き寮監との連携を密にし、健康・衛生管理の徹底を図る。特に、冬場のインフルエンザや感染性腸炎等の発症を未然に防ぐため、寮生に対してはインフルエンザワクチンの予防接種を推奨するとともに、手洗い・うがいの励行を周知・徹底する。

□カフェテリア及びショップに対する衛生管理及び学生満足度の向上

学生部及び栄養学関連の専門教員とともに、委託業者を交えてカフェテリア及びショップの運営に関する協議を実施する。主には、衛生管理の徹底に努めることや、学生のアンケート調査結果に基づく意見・要望等に対する検討を行い改善する。

【就職指導課】

1. 就職支援プログラムの改善と就職実績の更なる向上

□公務員講座と就職対策特別講座の連携・充実

昨年度より始めた後期の就職対策特別講座（マイナビ等）は、学生に有益な内容であったが、参加者少なく、必要な指導が行き届かなかった。学部・学科の理解を得ながら、キャリア教育（授業）に盛り込み、実施ができるよう工夫する。

2. 各学部・学科との連携

各学部・学科と連携をとり、各種連盟・協会、各種団体・企業等との学内説明会を実施できるように工夫する。

また、学外説明会等に学生が積極的に参加できるように支援する。

3. 地元の法人（企業）との関係強化と更なる開拓

地元の法人（企業）の更なる開拓→スキル・マナー等を身に付けた本学学生の就職→継続的な求人への依頼や地元の法人（企業）への就職数増加の好循環のサイクルを確立できるよう準備を進める。本学学生の地元の法人（企業）での活躍は、該当法人関係者への間接的なPR効果が期待され、中長期的ではあるが学生募集においても効果が期待される。また、地方創生を支援できるよう、地元の法人（企業）と連携し、就職先の地元定着を高められるよう連携を図る。

4. 学生支援システムの効果的活用

ホームページやSNSによる情報発信に対する学生や保護者のフォロワーを増やす働きかけを実施する。また、就職支援システム「UNIPA」のクリーニングや「UNIPA」を推進するため、求人票の掲示は止め、すべてを「UNIPA」に集約する。

本学ドメインのメールアドレスを有効活用し、就職指導課から有効な就職情報を直接学生に伝達ができるようにする。

平成 30 年度 達成状況

— 教 務 部 —

1. 入学定員の確保について

入学定員の確保は教務部において毎年、最重要課題にあげている。

九州栄養福祉大学は平成 31 年度入試において志願者が食物栄養学科は 36%、リハビリテーション学部は 15%それぞれ減少している。本年度も昨年に引き続き少子化や社会全体の経済状況の影響により、文系学部の就職有利が継続し、管理栄養士をはじめ資格取得を目指す学部学科においては例年以上に厳しい学生募集状況となった。また、志願者数の減少につながるその他の要因について現在、継続して調査を行っている。なお、食物栄養学科及び作業療法学科については、定員の確保がかなり厳しい状況となってきている。今後、抜本的な入試制度改革や戦略的な学生募集の取組みが必要と考える。

東筑紫短期大学は、全国的にも厳しい短期大学の学生募集状況の続く中、5%の志願者減に留めている。入学者数については、学生募集を通して大変健闘した結果と言える。オープンキャンパス、入試説明会、併設高校との連携や附属幼稚園とのつながり、高校訪問、出前講義、進学ガイダンスと大学と同様に、学長はじめ全教職員が一体となって学生募集に取り組んだ成果と考えられる。

2. 3つのポリシーに基づくカリキュラムの見直しについて

3つのポリシーについては、各学部学科において本年度も建学の精神に基づく PDCA サイクルに基づいて見直しを行っている。カリキュラムについては本学の建学の精神をはじめ、大学設置基準、各養成施設の指定基準をふまえた独自の教育方針をより明確化し、可視化・測定可能となるべく指針を学長の指示のもとに教授会を通しての確立を目指している。さらに本年度は、学科ごとにアセスメントポリシー並びにアセスメントポリシーに基づく学習成果の評価についても確立することができた。この評価で示される指標により今後もカリキュラムの見直しが進められる。

3. 教務業務の見直しについて

教務業務の質の向上と教育過程における学生支援と教育の成果に向けて一翼を担うことを昨年度は年度目標にあげていた。今年で2年目となる教学関係システム「UNI PA」の活用により、教育体制の支援及び情報の共有化を図ることができた。また、本年度は企画広報課を中心にホームページの刷新に取り組み、法人事務局、学生募集・広報委員会の協力を得て大学短大ともに新たにスタートすることができた。さらに本年度は、先生方のご協力のもと教職課程の再課程認定の申請を行い、大学、短大ともに文部科学省より無事に認可を受けることができた。教務部においては教務関係、学生募集、入試、社会貢献と多岐にわたる業務に加えその業務が集中する時期もあるため、ミスが起こらないよう業務の遂行を最優先してきてはいるが、引き続き次年度においても業務を見直していく必要があると考える。

4. 地域貢献の取り組みについて

本学の建学の精神に基づいた地域貢献の取り組みの一つとして、生活者実学の研究成果を地域の皆様に還元し、生涯学習に関与するためシニアカレッジと市民カレッジの公開講座を実施し、大変好評を得るとともに本学教育について社会的理解をいただくことができた。また、幼稚園教諭として活躍している卒業生の支援として毎年取り組んでいる免許更新講習を、担当の先生方にご協力いただき必修領域及び選択領域ともに本年度も無事に実施することができた。来年度も引き続き本学における教育研究が地域貢献に繋がるよう取り組んでいきたい。

平成 31 年度 年度目標

— 教 務 部 —

1. 入試制度の見直し

昨年度の入試結果を真摯に踏まえ、入学定員の確保に向けて来年度入試制度の改革を行う。具体的には、入試区分・入試方法や出願方法を見直し、特に大学では2021年度入試も見据えた大幅な制度見直しを行う。

2. 学生募集について

入試制度と並行して学生確保に向けた学生募集の方法についてあらためて見直す。大学案内パンフレット、オープンキャンパス、高校訪問やガイダンス等の募集活動に加え、ホームページの充実、併設校との連携強化に取り組み、費用対効果も踏まえて、学生募集・広報委員をはじめ全教職員でこの一年が勝負どころの認識を共有し、学生募集に全力で取り組んでいく。

3. 教務業務の見直しについて

教務業務の質の向上に努める。教育過程における学生支援と教育の成果に向けて業務内容の精査と充実をはかる。また、各々が昨年度の反省を踏まえた改善と教育体制の支援及び情報の共有化に向けて業務の効率の向上に努める。また、本年度はリハビリテーション学部において、理学療法士・作業療法士養成施設における指定規則の改正に伴うカリキュラムの申請業務を予定している。申請にあたっては先生方及び関係各部署のご協力をお願いしたい。

4. 地域貢献の取り組みについて

本学の建学の精神に基づいた地域貢献の取り組みの一つとして、生活者実学の研究成果を地域の方々に還元し、生涯学習に関与するため、シニアカレッジや市民カレッジ等の公開講座の実施に向けて取り組んでいく。

また、幼稚園教諭として活躍している卒業生の支援として、免許状更新講習を本年度も実施し、本学の教育にご理解をいただいでいく。

平成 30 年度 達成状況

－ 事 務 部 －

【平成 30 年度 年度目標】

重要な目標でありました講堂兼体育館新築工事、食堂棟新築工事、旧体育館解体工事等を完了すること。

【達成状況】

建設会社との綿密な打ち合わせを行いながら工事を進めた結果、工期内に講堂兼体育館と食堂棟が完成し、旧体育館の解体も完了することができました。学生の安全面を十分考慮したこと及び、皆様のご協力により事故等も無く完了することができました事に対し感謝申し上げます。

平成 31 年度 年度目標

－ 事 務 部 －

1. 教育環境整備の実施に伴う経費節約の協力依頼。
 - (1) 図書館耐震改修工事（夏季休暇期間中より実施予定）。
 - (2) 講堂兼体育館、食堂棟完成に伴う施設管理の実施。
 - (3) 旧体育館跡地に駐車場を整備（学生・園児・地域住民へ配慮）。
 - (4) 小倉南区キャンパス擁壁修繕工事（学生や地域住民への安全面考慮）。
2. 業務改善の実施（非効率業務の洗い出し、関連部署との連携）。
3. 消費税率改正への対応（8%→10%：平成 31 年 10 月改正予定）。
→予算申請済の機器備品等について、9 月までの支払完了を目標。
4. 「財務状況報告会（仮）」の実施
→一般教職員向けに学園の財務状況理解のための機会の提供。